



知

佐世保独楽を知る

歴史

日本のこまの歴史は古く、10世紀ころ、幼少時代の一条天皇が「こまつぶり」(こま回し)に興味を持たれたという話も残っているそうで、その当時は貴族の遊びだったようです。その後、こまを九州の庶民に広めたのは、京の都から大宰府に落ちて来た菅原道真であるという説があります。日本のこまの形はさまざまで、一般に南方系と大陸系に分けられます。佐世保独楽の原型は、台湾・インドの系統で、南方から中国を経て長崎に伝えられたとされています。

特長

佐世保独楽はラッキョウ型の一種で、球形に近い優美な形状と鉄の軸(剣)が特長です。また、赤・黄・緑・黒という異国情緒豊かな色使いにも特長があります。



原材料

硬木(主にブナ科のマテバシイ)



工具

(写真右から)ロクロ・玄のう(カナツチ)・荒かな・仕上げかな・丸かな・キリ。このほか馬工具(こまをロクロで回して削る際に、刃物を固定する道具)などを使います。



佐世保独楽

全国には多種多様なこまがあり、その独特の形や色には、それぞれの土地の歴史やお国柄が感じられます。鮮やかな色彩が異国情緒を漂わせる「佐世保独楽」もその一つで、長崎県の伝統的工芸品にも指定されています。

こまは、童謡「お正月」の中でも歌われるなど、ひと昔前は、子どもたちに人気がある遊具の一つでした。特に、佐世保では、佐世保独楽が身近な遊具として親しまれ、空き地でこまを回す子どもたちの姿が多く見られたものです。現在では、市場にはさまざまなおもちゃがあふれ、子どもたちの遊び方や生活環境なども変化することから、こまを回す子どもたちの姿を見る機会も少なくなりましたが、市内では、地域や学校などで子どもたちにこま回しを教える取り組みも行われています。今回は、佐世保の伝統的な民芸品としてわたしたちになじみの深い「佐世保独楽」を特集しました。

加工工程

